

第45回名古屋春栄会
演目のあらまし
(素謡と仕舞)

平成25年1月14日

名古屋春栄会事務局

目 次

〔素 謡〕

翁（おきな）	1
--------------	---

〔仕 舞〕

竹生島（ちくぶしま）	3
安宅（あたか）	4
桜川（さくらがわ）	5
岩舟（いわふね）	6
千手（せんじゅ）	7
天鼓（てんこ）	8
竜田（たつた）	9
角田川（すみだがわ）	10
羽衣（はごろも）	11

〔能のミ二知識	12〕
---------------	-----

このリーフレットは、第45回名古屋春栄会の素謡と仕舞の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齢にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

竹生島（ちくぶしま）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊舞働

【主人公】 前シテ：漁翁（面・三光尉）、後シテ：龍神（面・黒髭）

【作者】 金春禅竹

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

延喜帝（醍醐天皇）に仕える朝臣が、竹生島明神に参詣を志し、琵琶湖畔までやって来ます。丁度、老人が若い女をともなって釣舟を出しているのので、それに、声をかけて便船をたのみます。老人は快く彼を舟に乗せ、のどかな浦々の春景色を楽しみながら、竹生島に向かいます。竹生島に到着すると、老人は朝臣を神前に案内します。朝臣は、つれの女も一緒に来るので、この島は女人禁制と聞いているかと、不審がると、老人と女は、弁才天は女性の神であるから、女人を分け隔てはしないと、こもごもこの島の明神の由来を語ります。やがて二人の者は、実は人間ではないと、若い女は社殿の扉の内に入り、老人は波間にその姿を消します。

<中入>

そのあと、弁才天の社人が出て、朝臣に宝物を見せます。そうしているうちに、社殿が鳴動し、光輝き、音楽も聞えたと思うと弁才天が出現し、舞を舞います。続いて湖上が波立つと見るや、龍神が水中より現れて、朝臣に金銀珠玉の玉を捧げ、激しい舞を見せます。そして、弁才天と龍神とは仏が衆生を救うための二つの形であるといい、国土鎮護を約束し、弁才天は再び社殿に入り、龍神は湖水へと飛んで入ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

もとより衆生済度の誓。もとより衆生済度の誓。さまざまなれば。あるいは天女の形を現じ。有縁の衆生の願をかなえ。または下界の竜神となつて。国土を守る。誓を現わし。天女は宮中に入らせ給えば。竜神は湖水の上にかけて。波を蹴たて。水を返して天地に群がる大蛇の形。天地に群がる大蛇のかたちは。竜宮に飛んでぞ。入りにける。

安宅（あたか）

【分類】 四番目物（雑能＝現在物） *男舞

【主人公】 シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）

【作者】 観世小次郎信光

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

平家討伐に最も勲功のあった源義経も、戦がすむと兄頼朝から追われる身となります。偽山伏に姿をかえ、奥州に落ちのびようとする義経主従を、頼朝は国々に新しく関所を設けて止めようとしています。加賀国（石川県）安宅には、富樫某が下人と共に関を守っています。義経一行は、都を出てやっと安宅に着きますが、関のあることを聞いて、強力に様子を見にやらせると、なかなか用心がきびしいので、義経を強力に仕立て、南都東大寺建立勸進のための一行だといって通ろうとします。しかし関守が全員斬殺するというので、それでは仕方がない討たれようと、殊勝そうに最後の勤行をしますが、山伏を殺せば天罰が当たると威嚇するので、関守は少しひるみ、勸進帳を読めといいます。弁慶がもちあわせた巻物を勸進帳といつわって読み上げ、一度は通過を許されますが、義経の姿を見とがめられ追求を受けます。しかし、弁慶の機転と豪勇で首尾よく、その場を逃れることができます。関を通過して、ほっと一息ついているところへ、先刻の関守が後難を恐れ、非礼を詫びるため酒をもって後を追う、一同にふるまいます。酒宴をなっても弁慶は油断せず、力強い舞を見せ、関守に暇を告げ、一行に先を急がせます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

鳴るは滝の水。日は照るとも絶えずとうたり絶えずとうたりとくどく立てや。手束弓の。心許すな関守の人人。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り肩にうちかけ。虎の尾を踏み、毒蛇の口を逃れたる心ちして。陸奥の国へぞ、くだりける。

桜川（さくらがわ）

【分類】四番目物（狂女物） *イロエ

【主人公】前シテ：桜子の母（面・曲見）、後シテ：桜子の母（面・曲見）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（網ノ段の部分…下線部）

九州日向国（宮崎県）、桜の馬場の西に、母ひとり子ひとりの貧しい家がありました。その家の子、桜子は、東国方の人商人にわが身を売り、その代金と手紙を母に渡してくれと頼み、国を出ます。人商人が届けた手紙から桜子の身売りを知った母は、悲しみに心を乱し、氏神の木華開耶姫に我が子の無事を祈り、桜この行方を尋ねる旅に出ます。

<中入>

それから三年がたち、遠く常陸国（茨城県）の桜川はちょうど桜の季節です。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、今日は師僧に誘われて、近隣の花の名所の桜川に花見にやって来ます。里人は、桜川の川面に散る花びらをすくって狂う女がいるから、この稚児に見せるとよいとすすめます。呼び出された狂女は、九州からはるばるこの東国まで、我が子を探してやって来たことを語り、失った子の名前も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだろうが、どうして春なのに我が子の桜子は咲き出でぬかと嘆きます。さらに桜を信仰する謂れや我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、落花に誘われるように、桜子への思いを募らせて狂乱の極みとなります。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合わせます。母は正気に戻って嬉し涙を流し、親子は連れ立って帰国します。

【詞章】（網ノ段の部分の抜粋）

あたら桜の。あたら桜の科は散るぞ怨みなる。花もうし風もつらし。散れば誘う。誘えば散る花かずら。かけてのみ眺めしは。名も青柳の糸桜。霞の間には。かば桜。雲と見しは。三吉野の。三吉野の。三吉野の。川淀淹つ波の。花をすくわばもし。国栖魚やかからまし。または桜魚と。聞くも懐しや。いずれも白妙の。花も桜も。雪も波も見ながらに。すくい集め持ちたれども。これは木木の花。まことはわが尋ぬる。桜子ぞ恋しき。わが桜子ぞ。恋しき。

岩舟（いわふね）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭）

【作者】 不詳

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た^と告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っていた^{だけ}ればありがたいと言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだと言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波、えめぐりめぐりて住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮にひ引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

千手（せんじゅ）

【分類】 三番目物（現在鬘物） *序ノ舞
【主人公】 シテ：千手の前（面・増女、小面ニモ）
【作者】 金春禅竹

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

平重衡は、平清盛の五男で、一の谷の合戦では、大手（正面）の陣となった生田ノ森方面の副将でしたが、戦に敗れ、捕われて鎌倉に護送されます。鎌倉では狩野介宗茂に預けられ、幽囚の身で世の無常を嘆いています。源頼朝は、この若く凛々しい平家の御曹子に少なからず同情を寄せ、自分の侍女で、手越ノ宿の長者の娘である千手の前をつかわし、後いくばくもない命のつれづれを慰めます。ある春の雨の降る夜、宗茂は重衡に酒を勧めようとやって来ます。そこへ千手も琵琶を持って訪れます。重衡は、先日、千手を通じて頼朝に願い出てあった出家の望みがかなわぬことを告げられ、これもまた、父清盛の命令とはいいいながら、南都（奈良）の仏寺を焼いた罪業の報いかと嘆きます。千手は重衡の心中を思いやり、酒の酌をし、朗詠を謡い、舞を舞って、心を引き立たせようとします。重衡も興にのって、琵琶を弾くと、千手も琴を合わせ、夜の更けるまで、つかの間の小宴を楽しみますが、翌朝、重衡は勅命によって、また都へ送り帰されることになり、鎌倉を出立します。千手は、その後姿を涙ながらに見送るのでした。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

今は梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするにいず方も。網を置きたるごとくにて。のがれかねたる淀鯉の。生捕られつつ川越の。茂房が手に渡り。心のほかの都入り。げにや世の中は。定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りなば。とにもかくにも果てはせで。また鎌倉に渡さるる。ここはいづくぞ八つ橋の。雲居の都。いつかまた。三河の国や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限りぞと思いに。馴るればここも忍びねに。哀れ昔を思い妻の。灯暗うしては。数行虞氏が涙の。雨さえしきる夜の空。四面に楚歌の声の内。何とか返す舞の袖。思いの色にや出でぬらん。涙を添えてめぐらすも。雪のふるえの枯れてだに花咲く。千手の袖ならば。重ねていざや返さん。

天鼓（てんこ）

【分類】 四番目物（遊樂物・唐物） *楽

【主人公】 前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、後シテ：天鼓の霊（面・童子）

【作者】 不詳

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。[ここまでは能では演じられません]

そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆に泣いていますが、勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰させます。

<中入>

そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞楽を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、楽を奏し、喜びの舞を舞って興じます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鶺の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ。波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢。幻とこそなりにけれ。

竜田（たつた）

【分類】 四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【主人公】 前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【作者】 金春禅竹

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと言うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひさかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。
散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。さっさっの鈴の
声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ
木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拝再拝再拝と。山河草木国土
治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

角田川（すみだがわ）

【分類】四番目物（雑能＝狂女物） ＊カケリ

【主人公】シテ：狂女＝梅若丸の母（面：曲見）

【作者】観世十郎元雅

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

春の武蔵野、隅田川のほとりで大念仏を催すことになり、渡守がその参加者を募っています。そこへ一人の女物狂が物につかれたようにやって来ます。女は京の都の北白川の者で、子どもを人買いにさらわれ、そのため狂気になって我が子の行方を尋ね歩き、はるばる東国まで来たのです。そして渡舟に乗ろうとしますが、渡守はなかなか乗せようとしません。すると女は、かもめを見つけ、「名にしおば いざ言問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと」という在原業平の和歌を思い出し、業平は妻を、自分は我が子を捜しているが、その思いは同じだと嘆きます。渡守は哀れになり、舟に乗せてやり、舟を漕ぎながら川向こうの大念仏は、一年前、人商人に連れられた子どもが病死したのを人々が不憫に思い回向しているのだと語ります。その子こそ、尋ねる我が子梅若丸と知り、女は泣き伏します。同情した渡守は、女をその塚に案内します。母の念仏に、我が子の声が聞こえ、その姿が幻のように現れますが、その幻は夜明けと共に消え失せ、後には草の生い茂った塚があるのみでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

われもまた。いざこと問わん都鳥。いざこと問わん都鳥。わが思い子は東路に。ありやなしやと。問えども問えども答えぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいいてまし。げにや舟競う。堀江の川の水際に。来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これはまた。隅田川の東まで。思えば限りなく。遠くも来ぬるものかな。さりとは渡守。舟こぞりて狭くとも。乗せさせたまえ渡守。さりとは乗せて。たまえや。

羽衣（はごろも）

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【作者】 不詳

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充滿の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>